様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：１１６０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５３１０４０

研究課題名（和文）韓国軍事独裁政権下での夜学における民衆の学習・教育運動に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the YAHAK(night school) Education Movement in the 1970-80's Korea

研究代表者
浅野　かおる（ASANO, KAORU）

福島大学・行政政策学類・教授

研究者番号：１０２８２２５３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,800,000円、（間接経費）　540,000円

研究成果の概要（和文）：韓国では1970～1980年代において、民間で実施された夜学では、勤労青少年教育機関として中学校や高等学校での教育内容が教えられていたが、1970年代半ばから「生活夜学」、「労働夜学」などとよばれる夜学が登場する。それらの夜学の担い手として、キリスト教団体、大学生があげられ、労働運動や学生運動などと関連があった。またそれらの夜学ではパウロ・フレイレの教育思想の受容により「意識化」という用語が用いられるが、1980年代にはマルクス主義思想の受容によって、フレイレのいう「意識化」とは異なる意味をもつようになる。「意識化」は、当時の韓国の民衆教育論の中心的概念でもあった。

研究成果の概要（英文）：At YAHAK night schools in 1970-80's South Korea,junior high or high school curricula were adopted for youth who could not go up to those schools.In addition to this,SENGFAL-YAHAK and NODONG-YAHAK were also established in the middle of 1970's.These were run either by the Christian organization or student bodies of universities affected under the labor or the student movement in those days.But school curricula were not used at these night schools.It is noted that concept of "education for conscientization" from Paulo Freire was introduced into these night schools and then in 1980's was distorted into political indoctrination with Soviet Marxism.Conscientization was a key concept of the Korean Popular Education in those days.

研究分野：教育学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：夜学　社会教育　韓国

１．研究開始当初の背景

韓国では社会教育法（1982 年制定）にかわり 1999 年制定の平生教育法（平生教育とは生涯教育の意味）によって、中央政府レベルに平生教育センター、広域自治体レベルに地域平生教育情報センター、基礎自治体レベルに平生学習館（平生学習とは生涯学習の意味）といった施設が設置・運営され始め、2007 年の平生教育法全面改正により、平生教育の推進体制がさらに強化されるようになった。平生教育法制定以降の動向は、日本の社会教育研究者の関心をひき、韓国調査研究も増えつつある。一方、地域に平生学習施設が設置・運営される平生教育法の制定まで、社会教育が行われなかったわけでも、民間による自主的組織的な学習・教育活動がなかったわけでもない。日本で紹介されている韓国の社会教育の歴史は、基本的に法・政策や施策レベルの変遷に関するものが中心である。韓国における自主的、組織的な学習・教育活動としては、「夜学」をあげることができる。本研究では、1945 年の解放後の韓国において地域社会の中で組織的に行なわれた自主的な学習・教育活動のなかでも「夜学」に着目していきたい。「夜学」は今日でも韓国社会において存在しているが、韓国の社会教育・平生教育研究においては、研究は多くはないようである。韓国の「夜学」に関する研究については、これまで日本の社会教育研究では 1920 年代の「夜学」に関する研究はあるものの、1945 年解放後の「夜学」に関する研究は皆無といってもよい。この研究によって、現代の韓国の平生教育政策や学習・教育活動の理解、日本と韓国における比較社会教育研究の基礎を提供することができるものと考える。

２．研究の目的

韓国における植民地支配からの解放後（第二次世界大戦後）の社会教育の歴史を、民衆教育運動・自己教育運動の視点から再構成することが研究の全体構想であるが、この全体構想において、本研究では、軍事独裁政権に対して労働運動や学生運動が激しく行われた 1970～1980 年代に焦点をあて、それらの運動と結びつきながら自主的組織的に行われた民衆の学習・教育活動／運動、とりわけ「夜学」注目し、その教育学的な意味を明らかにすることを目的とするものである。

３．研究の方法

夜学に関する韓国での先行研究、および文献資料をもとに主として研究を進めていったが、その際に、1970～1980 年代における社会運動との関連、パウロ・フレイレの教育論の受容などの観点から把握しようと試みた。また、1970～80 年代の韓国社会の特徴として都市部への人口流入があるため、農村ではなく都市部の夜学をその対象とした。

４．研究成果

(1)韓国では、長い間、「義務教育」は 6 年間の初等学校までであった。1970～1980 年代における初等学校（当時は国民学校）から中学校への進学率をみると、1970 年には女性は 56.5%と半数ほどにすぎず、男性でも 74.3%と 4 分の 3 である。75 年では、女性 69.7%、男性 84.1%であり、80 年には、女性 94.1%、男性 97.3%と上昇する。中学校から高等学校への進学率は 1975 年には女性 72.3%、男性 76.3%、1980 年には女性 80.7%、男性 87.5%であったが、これは中学校に進学しなかった者を含めていない。1983 年の場合、女性 85.5%、男性 98.9%であるが、1980 年初等学校業者数と 1983 年の高校進学者数で再計算すると、女性 78.2%、男性 87.8%である。進学率は一貫して女性の方が低く、特に 80 年に至る前までの中学校への進学率には男女で著しい差があった。経済開発政策により、都市部の低賃金の労働集約型の労働現場に、1970 年代には初等学校を卒業した子どもたち（特に女性）が大量に流入させられていった。1980 年代には中卒者以上が労働者として労働現場に入っていったのである。

当時、国家主導の勤労青少年に対する教育機会としては、青少年職業学校、産業体付設学校、（高等）公民学校などがあった。本研究では夜学を国家の施策とは関連をもたない、民間（非営利）による学歴の認定されない学校制度外の教育の場、学習者が授業料などの費用負担なく学ぶことができる場をその対象としていく。夜学は、まずもって勤労青少年教育機関としての機能を果たしていたのである。

(2)1970～80 年代の夜学に対しては「検試（検定考試）夜学」、「生活夜学」、「労働夜学」という分類の仕方が用いられている。また、「教会夜学」、「貧民夜学」という用語も用いられている。「検試夜学」とは、「検定考試」とよばれる「中学校入学資格検定考試」、「高等学校入学資格検定考試」、「高等学校卒業資格検定考試」といった試験のことを指す。これに合格すると、初等学校、中学校、高等学校を卒業した者と同等の学力があるとみなされ、上級学校への進学の道が開かれる。検試夜学とは、検定考試の合格を目的に、中学校（高等学校）3 年間の教育課程を教える夜学であり、1970 年代以前より存在している。1 年間で中学校教育課程を教え、「卒業」となる夜学も存在しており、そうした夜学では検定考試の受験を目的にしていなかったことが確認できる。1970 年に無料の 1 年課程の夜学で定員 50 人に対し 150 人余りの働く女性青年の応募があったということから、当時の働く若い女性の学ぶことに対する熱意がうかがえる。検定考試の合格を必ずしも目的としないのは、当時の韓国社会において女性が学歴によって階層上昇を果たすことは、男性に比べて極めて困難だったと考えられることとも関連するであろう。

こうした学校教育での教育課程に準じた教育内容、国定教科書を基本とする夜学に対して、1970 年代半ばに「生活夜学」と呼ばれる夜学が登場した。これは、検試合格率の低さや検試の階層上昇要求などに対する、夜学運営者の批判からつくられたとされる。生活夜学は、1990 年代初めまで存在していたが、多様な教育内容を展開していた。6 カ月や 10 カ月など 1 年に満たない教育期間で、国語、社会、歴史、漢字、英語、常識（数学など）、生活科学（衛生、保健など）、自治会などの科目をおき、労働者の生活に即した教育内容、教材を夜学が独自につくっていった。また、生活夜学では、教育期間の間に夜学教師と学習者間の関係性や問題認識の把握に関していくつかの段階を設定して教育内容と活動を展開していたようだが、最後の段階として、夜学期間中に学んだことをどのように活動を通して具体化していくかという問題から、教育期間を終えた「卒業」後に「後続」として小集団を形成し活動を模索することが重要視されていた。この後続の小集団は、1980 年代の生活夜学、労働夜学で最も重要な問題であったといわれている。検定考試夜学のような中学校（高等学校）の教育内容を教える夜学ではない夜学にも学習者が集ったということは、当時の学習者の要求の多様性をうかがわせる

同じく 1970 年代半ばに、「労働夜学」も登場した。労働夜学では工場労働者に焦点を合わせ、労働者の権利保障の観点から労働法や労働問題、労働組合に関して教育内容に位置づけていた。同様の教育内容をもつ生活夜学もあり、生活夜学と労働夜学を厳密に区別することは困難とされる。また、政治意識や階級意識を「意識化」させることをその教育目的におく労働夜学も現れてくる。

1970 年代末より生活夜学や労働夜学などに対する監視や弾圧が行なわれ、1983 年には大きな弾圧事件も起きる。1987 年 6 月の「民主化宣言」以降、韓国社会において政治的な自由が拡大する中で、労働者に対する「政治意識化教育」の場も拡大し、全国民衆教育団体協議会の結成、各地での民衆教育機関（民衆学校など）や労働者教育機関（労働者大学、労働者学校など）の設立がなされる。労働者学校の中には、労働夜学から転換したものもあった。この時期には、こうした民衆教育機関や労働者教育機関の設立・運営が相次ぐ中で、労働夜学・生活夜学のあり方が担い手の中では論議されていった。

(3)夜学の担い手として、キリスト教団体、学生運動に着目した。

①キリスト教団体が工場労働者に対して教育活動を行うことは、工場労働者の不満を和らげるものとして雇い主からも好意的に見られていた。こうしたキリスト教教育活動がある一方で、工場労働者や貧民に対して、権利保障の立場から、都市産業宣教会、都市宣教委員会、カトリック労働青年会、韓国キリスト教学生総連盟による学生社会開発団等が、夜学活動などキリスト教教育運動を展開していく。その背景として、キリスト教団体では急増する産業人口に対し「産業伝道」を展開していたが、労働者の現実と社会的矛盾に対する認識を深め、1960 年代後半からはその目的を労働運動に対する支援へと拡大し、「伝道」から「宣教」に転換したことがあげられる。そこにはキリスト教が社会問題に対する意識と実践、民衆の成長のための解放教育を実施することを提示した 1968 年世界教会協議会の影響もあったとされる。都市産業宣教会は、労働運動指導者訓練、労働者教育、労働組合組織と労組運営指導、労働争議時の支援などを主要活動とした。1970 年代に中小企業で働く若い女性たちが労働夜学や小グループ活動に参加する中で、労働組合について学び、民主的な労働組合の形成に影響を与えていった。また、農村の疲弊のため離農して都市部に流入し、無許可バラックに集住していた都市貧民に対しては、貧民宣教として、住民を組織化して健康問題、生活問題、住民教育が取り組まれ、その中で夜学がおこなわれることもあった。

②夜学は、当時の学生運動における運動上の論争と強く結びついていた。1970 年代半ばの政治的抑圧のもとで学生運動内部では運動全体における学生運動の役割に対して論争が生まれる。一つは政治闘争の重要性を強調する「政治闘争論」であり、もう一方は「現場準備論」で、労働現場で労働大衆を意識化、組織化することを通して韓国社会の変革を追求するものである。80 年代に入ると、この二つの立場は「夜批－展望論争」として登場する。これは、1982 年に出された小冊子『夜学批判』とそれを批判した小冊子『学生運動の展望』にみられる論争であるが、『夜学批判』が「現場準備論」、『学生運動の展望』が「政治闘争論」の流れをくむものであった。「現場準備論」の流れとそれを引きつぐ論理によって、夜学は、学生運動家にとって「意識化」の対象となる未成熟な民衆が存在する空間であり、大学生は科学的知識を持った教授者、民衆はそれを習得する学習者とされ、また学生運動の観点からは夜学は民衆との出会いの中で運動を実現しようとする空間の意味をもったと指摘されている。夜学は学生運動の重要な拠点としての位置を占めていたのであり、80 年代にはそうした志向性をもつ学生が夜学教師になることが増加したという。

(4)1970～80 年代の夜学に関する資料・文献には、「意識化」という用語がみられるが、これはパウロ・フレイレの教育思想の受容と関連するものである。

①パウロ・フレイレの教育思想は、韓国の民衆神学者・文東煥により 1971 年 12 月に初めて韓国で紹介される。1970 年代末に『ペダゴジー』（邦訳『被抑圧者の教育学』に該当）、『教育と意識化』（邦訳『伝達か対話か』に

該当）の翻訳書が出される（両方とも即時販売禁止、禁書）が、それ以前にも英語版などでフレイレの思想に接する場合もあった。フレイレの教育思想は、キリスト教教育運動で受容され、そして夜学運動、教師教育運動など、1970 年代半ば以降から 1980 年代に広範に影響を与えた。主要な特徴の一つは、フレイレの教育思想は、アメリカのコミュニティ・オーガナイザーであるアリンスキー（Saul D. Alinsky、邦訳『市民運動の組織論』）の組織化論と結合され、「意識化・組織化教育」という概念で受け入れられたことである。「意識化・組織化」という連結は、フレイレの教育思想の韓国的受容過程を理解するのに非常に重要な部分と指摘されている。時期的にみると、フレイレの教育思想が紹介される前に、アリンスキーの組織化論の方が先に紹介されており、都市宣教委員会ではその訓練プログラムを貧民地域で実際に行い、また 1971 年 6 月にはアリンスキー自身が韓国を訪れている。アリンスキーの組織化論は具体的、実践的に運動の中に根づいていったものといえる。

②キリスト教教育運動、夜学運動、教師教育運動において、フレイレの教育思想は「理念型」として受容され、フレイレの教育方法論に対する具体的な研究や実践における方法論的適用は進展しなかったと指摘されている。1970 年代後半より、フレイレの思想は、夜学運動において特に重要な理念的準拠、伝統的な学校体制とは異なる原理を提供する役割を果たしていた。フレイレの著作を教師教育の資料として使用し、「対話式教育」や「問題提起式教育」を実施しようとしていた夜学もあった。学習者の生活世界を基盤とした教材をつくり、社会問題を認識できる教育内容を構成しようと試みたり、労働者の生活に埋め込まれている「生成語」を中心に学習内容を構成し、討論を通して批判的な意識を形成する教育活動にとりくんだりした夜学もあった。フレイレの教育論における識字教育そのものの点からみると、夜学では積極的に取り組まれていなかった。それは、当時は韓国社会での識字率は高いとみなされていたためであり、また夜学自体が初等教育などを修了した勤労青少年を対象にした教育機関という位置づけであったためと考えられる。

③1980 年代以降、マルクス主義の本格的な流入、特にスターリン主義によって解釈されたレーニン主義政治運動の流入以後、「意識化」概念は、政治的動員の手段、外部からの注入による民衆の意識変革という認識のもとに、フレイレの「意識化」とは異なる意味合いをもつようになってくる。

(5)当時の韓国の民衆教育論において、フレイレの教育思想は中心的に位置づいていた。1981 年には韓国キリスト教民衆教育研究所が設立される。また、1986 年に発行されたフレイレの翻訳書『ペダゴジー』（邦訳『被抑圧者の教育学』に該当）ではその副題が「民衆教育論」とつけられている。民衆教育論は、生活夜学や労働夜学で用いられた教育論ということもできる。しかし、1980 年代の民衆教育運動での「意識化」教育は、知識人が先験的に規定した意識化の内容を民衆が受動的に受けいれるものと理解される傾向が強くなっていく。スターリン的解釈によるマルクス主義を基盤にした民衆教育運動では、政治変革のための「宣伝・扇動」の性格が強い意識化教育に転換したとされる。(2)でふれた労働夜学や 1987 年以降の「民衆教育」とは、こうした性格を帯びたものでもある。当時の民衆教育を上（知識人）からの政治意識化とした流れに対しては、後に韓国の社会教育研究者によって批判され、民衆教育は民衆の主体的自己覚醒運動、下からの地域社会を中心とした学習共同体での意思疎通的な相互作用を通して政治問題が現れ、実践と連結されるものでなければならないと提起された。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

①浅野かおる「翻訳　韓国における『夜学』の歴史とその意義について－『夜学の実態および支援方案研究』の一部翻訳を通して－」『行政社会論集』第 26 巻第 1 号、2013 年、pp.109-141、査読無。

〔学会発表〕（計１件）

①浅野かおる「韓国社会運動における『夜学』－1970～1980 年代－」、日本社会教育学会第 60 回研究大会、2013 年 9 月 28 日、東京学芸大学

６．研究組織

(1)研究代表者

浅野 かおる（ASANO KAORU）
福島大学・行政政策学類・教授
研究者番号：10282253